第１回子ども・青少年を健やかに育むための
文化・芸術振興に係る検討会　会議録

日　時	令和元年９月２日（月）１８時から１９時４５分まで
場　所	ルビノ京都堀川３階　アムールの間
委　員	新川達郎会長、伊豆田千加委員、上田静男委員、栗山圭子委員、小崎恭弘委員、竹内香織委員、
次　第	◇　議題 （1）　現状報告 （2）　意見交換

(1)　現状報告

事務局から資料１、２、参考資料を用いて説明し、また、新川委員を会長に指名。

(2)　意見交換

主な意見等

○　京都に住んでいる子どもだからこそできることを体験させてあげたい。自分たちでやってみることで、新しいものに対する興味につながっていくとか、プロセスを楽しめる心を創っていくといったところに重点を置いていくと、文化に対する意識が広がっていくのではないか。

○　例えば能という伝統文化を体験した子どもの話を聞いたところによると、行く前は理解できず寝てしまうかもしれないと思っていたが、演目の内容や流れを教えられた後では、意味も分かり前向きに捉えることができたということがあった。子どもにそういう機会を与えるのは大変意義がある。

○　子どもの成長において、非認知能力が大事と言われている中で、ゼロ歳児から文化・芸術に触れていくという姿勢が非常に重要と考える。

○　京都の人は国宝が身近にあることを意識されていない。京都に住んでいることの意味とか値打ちということはどれくらい感じておられるのかなと、外の人間から見るとすごくうらやましい半面、もったいないと思うことがある。自分の文化というのは、外から見てみたり、異文化を理解していく中で知るということもあると思う。

○　他の自治体では、小中学生が博物館などに無料で入れるカードがある。予算のこともあるが、実施できている自治体もある中で、取組に対する行政の本気度がどれくらいあるのかということにもつながる。

○　文化は生活の中に根ざさないと文化にはなり得ないと思う。しかし、暮らしの環境はすごく変わり、世代によって当たり前のことがそうでなくなってきている。そのため、親世代と一緒に取り組める事業がもっと多くあっても良いのではないか。

○　全国各地で伝統芸能やお祭りなどがあるが、それを学校で教える指導者がいなかったり、地域の担い手が減っていることなどにより、子ども達に伝えられない状況になっている。まして、子ども達も受け継いでいこうというような主体的な気持ちを育みにくいという話も聞く。あらゆる機会を通じて文化・芸術に触れられる場面がもっとあったら良いと思う。

○　例えば茶道の体験などでは、形ばかりではなく、所作に含まれる本来の心というか気持ちの部分を伝えることのほうが、子どもたちを健やかに育むことにつながっていくのではないかと思うこともある。

○　京都府・京都市において、親子や乳幼児を対象とした子どもたち向けの事業はこの資料以外にも多くあるが、それが府民・市民に知られていないのではないか。また、ひきこもりやひとり親家庭、施設で生活している子どもたちにどう届けるかという課題もある。

○　京都市内の中心部から離れていても、人が生活してきたところには、その地域の文化や芸術がある。その文化の中で育っていくことの楽しさとかすばらしさを大人が伝えていけるのかということが大事である。あわせて、子どもたちは伝えられるだけでなく、役割を持つこととで、体験を通してインプットし、それを人に伝えるというアウトプットを行うというサイクルの中で、自分の中で文化を育んでいくのだと思う。非認知能力というのは数値では表せない力かもしれないが、人とつながっていく非常に大事な力だと思うので、そこを育てていくということも大事だと思う。

○　子どもはもちろん主体であるが、それを支えるのは、地域の人であり、全世代の人が関わっている。全世代が共同して子どもたちを支えていけるような枠組みが必要ではないか。

○　保護者の文化に対する関心度や意識の高さ、社会階層によっても子ども達が文化に触れる機会は変わってくるため、保護者も含めた取組も大事。

○　伝統文化を軸としながらも、現代アートや海外の文化とコラボレーションしていくという視点が弱い。

○　海外では、貧困エリアにおいて、文化・芸術を教える団体を支援することで、低資金で習い事ができるようにするなど、子ども達のモチベーションや自己肯定感を高める取組を行っている。このように文化・芸術は、ひとり親やひきこもりなどの課題解決の視点も考えられる。

○　京都府も京都市も若者の文化、新しい文化・芸術に対して寛容ではないように思う。公園や川べりの利用に縛りがあったり、音がうるさいということでお寺ではできないこともある。伝統ある町の中にも、新しい文化・芸術に対する寛容さが広がっていけばよいと思う。

○　今の親御さんは地域とのつながりがないことが多い。地蔵盆や地域の祭りに参加するといっても中々難しい。親子で楽しめるステージや、もっと深く体験できるステージなどがバランスよくあってもいいのではないか。

○　文化は自分で選択して失敗することが大事だと思う。行って面白くなかったという経験することで本当に好きなことに目を向ける力が養われるのであり、選択をした人を褒めてあげることも大事である。選択できるということは、選択の幅があることと実際に選択できることの両方が必要であり、これらが保証される仕組みが大事だと思う。

○　１００回聞くより１回見た方がいいのは確かだと思う。しかし、１回見て分かったような気になってもそれは間違いであり、１００回みて、そのルーツや自分との関わりを１００回考えてみて、その結果行動して、満足できたというところまでもっていかないと本当は残らないのだと思う。

○　今の小学生は、親の世代よりもいろいろ文化・芸術活動を体験しているように思う。しかし、子どもが本当に求めているものかどうか、興味をもって取り組んでいるのかどうかというところが気になる。

○　伝統文化を伝えると自分たちが伝統文化の担い手にならなければいけないと思い込もうとする。子どもはどこかで大人を忖度しており、心から担い手になりたいと思えるようにするのは難しい。

会長まとめ

○　今日の話をまとめてみると、京都には伝統的で本物の文化・芸術があり、親も子どもも、どうやってそれらの楽しみを享受し、人生を豊かにしていくかということが一つめの論点であった。

○　次に、伝統的な活動だけでなく新しい人やものによってこどもの学びや育ちに大きく関わっていける資源が存在するが、仕組み自体が伝統的な役割に縛られてしまっていて、中々それ以外のものに目を向けることができないため、どうやってそれを乗り越えていくのかということが二つ目の論点だったと思う。

○　次に、親子や周りの人達も含めて、学んだり、教えたり教わったりして、その中で子どもたちが成長したり、担い手になったり、次の世代に教えたりするような循環させていくということが、京都の文化・芸術振興の最大の狙いではないかというのが三つ目の論点かなと感じた。

○　次回は事務局で論点整理していただき、さらに議論していきたい。